



「風の事典」

真木太一・新野 宏・
野村卓史・林 陽生・
山川修治 編

丸善出版, 2011年11月
267頁, 8500円 (本体価格)
ISBN 978-4-621-08404-5

事典といえば、通常は“あ”とか“A”から順に見出し語が並んだ、辞書式の分厚い書籍を思い浮かべる。この事典はそれと違い、分野別に13章に分けられている。そして項目見出し語が、短い章では7項、長い章では25項ほど設けられ、それぞれが1ページまたは2ページで図入りで説明されている。本書は、まず目次をひとつおろ眺めて見るに限る。各項目にどのようなことが書かれているのか、折りにふれて読んでみたくなること請け合いである。

例えば、1章は「風と生活」と題され、毎日の生活や各地の風俗・文化と風との関わりが取り上げられている。こう説明されても大して興味が湧かないであろうが、項目見出しを追っていくと、例えば扇風機などという項がある。日常、扇風機のために事典を開く機会はあまりないだけに、何が書いてあるのかな？と、はめられてしまうのである。さらに、風と文学、風と映画といった項目が目にとびこむ。1章の最後には「かぜとインフルエンザ」という項目がある。ページを開くと、見出し語の脇にサブタイトルが記されている。

—具合の悪いときはゆっくり休むことに限る—
このような項目を1ページの文章に集約するには、

各執筆者は広い素養を踏まえての独断と偏見、つまり非常な思い切りを必要とされたであろう。これは1章にとどまらない。編者を含む約100名の執筆者各位のご苦勞が忍ばれる。その仕上がりをよく味わいながら拝読したい。

2章「風の基礎」と3章「さまざまな風」には、風に関する気象学の基礎的事項がまとめられ、全編中で最も項目数の多い部分である。項目見出し語には必ずしも風の字が含まれない。「雲」の項は、開いてみるとサブタイトルが一風がつくる雲と雲が起す風一であり、なるほどと了解できる。4章以降のタイトルはすべて「風と〇〇」の形で、〇〇の部分には地形・景観、水の関わり、地球環境問題、エネルギー、災害、農業、都市、乗り物、スポーツ、動植物の各語が入る。こうして見ると、風が関連する分野の広さに改めて気付かされるし、これらの区分で事典を組んだ発想にも改めて感心する。それにしても「風と乗り物」とはどのような内容なのか。熱気球などはいかにも風に支配されそうだが、と考えて目次の項目見出しを探すと、これは乗り物ではなく、スポーツの章に載っている。グライダー、ヨットもそうだ。さらにスキージャンプ、野球、ゴルフ、サッカーと多様なスポーツが項目化されている。乗り物では……「飛行機」、これは確かに風との関係が大きいだろう。他には……「自動車」？……サブタイトルに一風とたたかう車体とある。さらには「モーターサイクル」……こちらは一風はライダーの友だち一、そうなのか。このように、事典でありながら、見聞を広げてくれる趣味の読み物といった気分でも手にとることができる。

その半面、事典としての機能や効用はどのようなのだろうか。事典で特定分野の詳細を勉強することは無理な

話で、そもそも事典をひも解く人の多くは、専門用語の意味や、それが表す現象の要を得た説明で満足する場合が多いであろう。本書の場合、キーワードを探すには目次か索引を見ることになる。気象学で構成された2章、3章に注目すれば、乱流と層流、風のシア、地衡風などの事項や専門用語、大気大循環、台風、ダウンバーストなどの主要な諸現象は目次から該当項目を発見でき、そのページを開けば事典に期待されるような説明に出合える。しかし、事典として「風を表す」という項目を探す人はいないだろう。そのページを開いてみれば、内容はウインドローズとホドグラフであり、確かに索引からはこれらの語も探せるのである。他に、気の付いた一例として、4章に逆転層・冷気湖なる項目があり、そこで斜面温暖帯にふれてい

る。しかし、その説明は十分ではなく、別項を参照せよという目印もない。ところが斜面温暖帯は9章の1項目として扱われているのである。もう一例を挙げれば、8章の熱波という項目のページでヒートアイランドにもふれていて、索引でヒートアイランドを引けばこのページが表示されている。ところがヒートアイランド現象は10章の1項目として2ページが与えられているのである。これらは単なる校閲の不完全さとも言えようが、全編の構成方法に由来する齟齬という一面も感じられ、若干ながら使いにくい思いがする。やはり、辞書的に利用する前に、全編にわたって拾い読みを楽しむ余裕を持たれるのがお勧めである。

(埼玉大学 吉門 洋)